挾間の里唄　について

河野百雄

Ⅰ　挾間町一村一文化推進事業の概要

平成十二年度に県から一村一文化推進事業の指定を受けた。町内上市の故加藤正人先生が生前県内各地を訪ね、こつこつと収集された里唄は、千数百曲に及んでおりますが、そのうちの町内の里唄八曲を選定し、豊陽会会主、安東先生の手により編曲され陽の目を見ることができました。

一．里唄文化の普及について

町に伝わる地元の里唄を、町の人が愛し大切にすることから始め、如何に活用してゆくかが大きな課題であり、これからの責任でもあると思われます。

二．里唄の過去の歴史について

昭和四十五年挾間町誌の編纂の際の調査によると町内では、六十一曲の里唄があり各地の調査員も六十数名に及ぶ記録が残されている。調査した方の大半が　亡くなられているのが現在の状況です。

三．調査及び記録について

その歴史的背景及びいわれ等の伝承を調査し、これを記録に残す仕事。

四．調査員の依頼について

二宮修二氏、工藤佐津喜氏、大矢久雄氏、吉田洋子氏、薗田由紀子氏、河野百雄氏

五．八曲について

①挾間力哉口説　②挾間猿丸大夫　③挾間団七踊り　④土手つき唄　⑤もみす唄　⑥子守唄　⑦木挽唄　⑧田植え唄

Ⅱ　里唄調査報告書

一．調査の目的　挾間町に残る里唄について、その歴史、唄われたころの生活の様子などを調査し、里唄のことを知り里唄のよりよい普及振興に努める。

二．調査対象　挾間町内各区

三．調査の期間　平成十四年七月～十五年三月

四．調査方法　面接調査・現地調査

五．里唄の分析　挾間町でこれまでに調査された唄を「地区別数」「種類別数」でしらべてみると次のようになる。

①地区別の数について

谷地区　酒野五　阿鉢三　中村三

挾間地区　下市八　上市一　北方五　柏野三
由布川地区　古野四　朴木十八
石城地区　七蔵司四　来鉢三　内成詰六

②種類別数について

田の草取り唄六　さえもん六　けっつらかし四
酒盛り唄四　田の草踊り三　毬つき唄三
ヤンソレ二　田植え唄二　もみすり唄二
琉球節二　のぞき節二　牛若丸二　三調子
二　地搗き唄二　六調子一　木挽き唄一
団七踊り一　いろは口説一　那須与一一
力哉口説一　土手つき唄一　子守唄一　し
んぱんくずし一　お手玉唄一　やりとり唄一
盆口説き一　家移りゲー一　きりこえ一
三勝一　酒造り唄一　駄賃取り唄一　入れ
こ一　ヨンゴヨンゴ節一　穂結和尚一　鈴
木主水一　書生節一

六．現地調査結果の報告

(イ)　団七踊り

①調査年月日　平成十四年十月二十五日(金)
②調査場所　来鉢中　辻集落
③調査担当者　大矢久雄・工藤佐津喜・吉田洋子
④回答者　阿南辰巳氏　八十六歳　男性

「団七踊り」の起源はわからない。おそらく江戸時代から伝わったものと思われる。昔は踊りを子供だけで踊っていた。男一人女二人の三人一組。女の子がいない年は男の子が変わって踊っていました。衣装は昔は、男は上は白の肌襦袢に袴、女は若い人の長襦袢、男は白の鉢巻、白のたすき、女の子は赤の鉢巻と赤のたすき、履物は男の子も、女の子もわらぞうりでした。お盆に、供養踊りとして踊られていた。地蔵堂の前の広場で踊っていた。伴奏は拍子木、太鼓、三味線であった。昔、歌っていた口説きの一節に、「来鉢ゃそこのけ臼杵が元じゃ」というくだりもあった。「団七踊」は、昔は門外不出で辻集落だけのものであった。団七踊りが一番盛んであったのは阿南さんの話では、大正十三，十四年ごろと昭和十七，十八年ごろであった。戦前（昭和初期から十数年ごろまで）特に盛んに踊られていた。その時は、新盆の家の前の庭先で踊っていた。別府の古賀の原や南大分の三ケ田町等にも呼ばれていったこともある。昭和初期は子供だけで踊っていた。戦中、戦後一時途絶えた時期もあったが、昭和三十年代になると復活した。その時辻集落以外の地域の方にも広めた。その時、婦人会を中心に広まっていき現在の形に至った。伴奏音楽は、拍子木、太鼓、三味線等であったが三味線を弾ける人が無かったので、他の地区の人にお願いした。口説きの文集は池永さんが持っている。（後日、池永さんに聞いたが池永さんの手元に無かった。）三人一組の踊り、前が姉　くさりがま中

が男　後が妹　なぎなた。他の地域に呼ばれて踊りにいったとき、踊りがだいすきな自分がつれて行ってもらえなかったことがあり、とても残念だった。

(ロ)　団七踊り

①調査年月日　平成十四年十二月十九日

②調査場所　来鉢　辻集落

③調査対象　加藤武義氏　大正十年四月一日　八十一歳

④内容

池永品吉さんは、口説き、踊りの名手であった。もう亡くなられたが、阿部こまきさん・伊東みさおさんも上手に口説いていた。生前の加籐正人先生とお話した記憶によると、先生は臼杵から伝わってきたのではないかといっていた。木佐上（今の佐賀関）に残っている。八月二十四日の地蔵盆に地蔵堂の前でお経をあげ、そのあとで踊っていた。お大師さんの縁日にも踊っていた。衣装は、浴衣にたすき（男は白たすき、女は赤）今と違って薙刀とかではなく、篠竹の両側に和紙の房をつけて踊っていた。（朝地町の板居迫でも昔これと同じように団七踊りを踊っていた）よそにもよく行っていた。古賀原とか石城小学校の校庭でも踊っていた。高崎の人たちは「ケツラカシ」というのを踊っていた。赤野の中尾先生の家の前の道路でも踊っていた。団七踊りのほかにサエモン、猿丸大夫も踊っていた。田植えの終わった後の宴席で、木やり唄なども歌われていた。池永又五郎さんが上手に歌っていた。

(ハ)　その他

吉田和見さん

挾間力哉口説出4番の「お名を申せば　上総の上よ」は「上」ではなくて「守」の字を使うべきだと思う。

(ニ)　子守唄の風景

下市　二宮ツギノさん（九十一歳）　平成十四年十一月三日ケアポート川崎にて　吉田洋子調査

昔（明治から大正・昭和の初め）は、挾間は全くの農村地帯で、ほとんどの家が農家でした。その農家のなかに、米をたくさん作っている農家や少ししか作らない農家などがありました。そのころは一軒の家に子供がたくさんいて、兄弟は五，六人が普通で多いところは十人もいる家もありました。女の子は十歳ぐらいになると多くの家庭の子供は、子守奉公に出されました。特に小さな農家の子供は必ず奉公に出されました。奉公はよその家に行って、そこの子供の子守をするのです。これを「子守奉公」といっていました。そこの家に行って主に子守をしたり掃除、洗濯などをしながらすごすのです。この奉公をしながら、他人の家で行儀や礼儀を見習うのです。他人の家ですからわがままは全く言えません。朝から晩まで子守です。着るものはそこのうちの人が買ってくれたものを着ますから贅沢は言えません。新しい着物はお盆と正月に買ってくれるだけです。

お盆や正月には下駄や草履も買ってくれることもありました。少しのお金を貰った時は自分のお母さんやお父さんに持って帰ってあげて家計の足しにしてもらい自分でつかうことはありませんでした。こんな様子でしたからたまに服でも買ってもらおうものなら飛び上るほどうれしかったそうです。それに食事のときは、家族の座るところとは違った別の小さな部屋か、部屋の中なら一番端っこに腰掛けて食べます。家族みんなは座って食べますが、子守奉公人は上がりはなに腰掛けて食べます。こうしたほうが用事があるときにすぐ立てるからです。食べ物も一緒のものではなく、少しまずいものを食べていました。そんな苦しい奉公の中で歌われたのがこの子守唄だと思います。子供はかわいいのですが一日中遊びたい盛りの子供が子守をするのは本当につらい仕事です。子供がきげんのいいときはいいが子供が泣くと、「どうして子供を泣かすんかえ」と叱られます。それで泣かさないように一生懸命あやしたりしてすごします。それでも「子守は楽なもんじゃ」といわれるのが残念なようでした。ですから子守唄も、やや悲しさを帯びた歌の調子になっています。（イ短調）子守奉公人は、いつも親に会いたい、家に帰りたいという気持ちがあったのですが、家が貧乏であれば帰るわけにも行かないのが普通でした。男の子は十三、四歳になると農家の手伝いが出来ますので、奉公に出されます。こんな人を「なご」「作男」といっていました。こんな人も苦労してしごとをしました。

(ホ) 挾間田植え唄の風景

下市　二宮ツギノさんの話から

○挾間の昭和の初めの頃の田植えは、田植えをたいていの家が一日で済ましてしまうようにしていました。田植えの前の日には、そのうちの主婦やおばあさん、加勢の人たちで苗とりをします。苗は苗代でつくっていましたので、苗代田といって、水のよく入る湿地気味の田んぼを選んで苗を作ります。前の日に苗をたくさん取っておくと田植えが早く済みます。

○田植えの日になると、若い女も中年も年よりも子供もみんなで田植えをします。子供は苗運び、苗配りをします。男はこの場合「うなり」という特別な名前が付いていて、畦の上に立っていて、綱の引き手や苗運びに声をかけて、仕事の能率を上げさせたり、早苗の列がまっすぐに行っているか、水はどうかなど、色々に気を配ります。「うなり」は経験の深い男子で仕事を詳しく知った人でなければなりませんでした。

○いよいよ田植え綱がひかれ、植え始めるとどんどん植えて後ずさりしていきます。早く植えないと誰が早いとか遅いとか、わかりますからみんな頑張って植えていきます。

○そのうち仕事が単調になると誰かが声をかけます。「今

日は田植えで、だれか歌わんかえ」　そこで、田植え歌が出ます。田植え歌の中に「ズレズレ」という言葉が入っていますがこれは、後ろに下がれという意味です。田植えの仕方で挾間では、ほとんどが植えながら後ろに下がるのが普通ですが、地方によっては、前に進みながら植えて行くところもあります。

○田植えがすんで田上がりになると、少しの休みの日をとって骨休めをします。田上がりの日には饅頭をたいたり、ご馳走を作ってみんなでゆっくり休みました。そのときにも田植え歌も出ました。

(へ)　民謡　もみすりの風景　　挾間幸安氏

もみすりは私たちの子供の頃は、臼はかごに赤土で練った土を編んだかごに入れて、どの農家も手作りしていました。土だけで作ると臼の目がつぶれてしまうので、目になるところには、細く割った樫の木を埋め込んで強くしたものです。これをトー臼と言っていた。下臼に心棒があり、上臼を心棒に差し込む。上臼は上がロウト状に作ってあり、そこにモミを入れる。この臼に、大きな臼回しの手をつけて、回して臼回しをします。これでモミは摺れていき、摺ったものを万石という機械にかけて、籾穀と米粒を選別していきます。仕事を一軒の農家だけで摺るところもあり数軒で一緒に摺るところもあった。こんな時にももみすり歌は歌われた。

あとがき

今回挾間里唄について会誌に掲載いたしましたのは、里唄の八曲の決定の経過を、多くの方々に知って戴きたいことと、調査された方々に対する感謝の気持ちを込めてのことです。

また、故加藤正人先生の残された偉業についてでありますが、先生は永い歳月をかけて、私財を投じ県下の里唄を調査され、千数百曲にも及ぶ唄に曲を付けられ後世に残されました。このことは永く語り続けてゆかなければならないと思っております。